

## ティーチング・ポートフォリオ

江村綾野（幼児教育学科）

（記入日：2026年2月16日）

### 1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

乳児保育Ⅱ（2年前期選択必修科目2単位）

子育て支援（3年後期選択必修科目2単位）

子ども家庭支援の心理学（3年前期選択必修科目2単位）

幼児理解の理論と方法（3年前期選択必修科目2単位）

保育教職実践演習（幼稚園）（4年後期選択必修科目2単位）

保育実習演習Ⅰ（事前事後指導）（2年後期選択必修科目1単位）

保育実習Ⅰ（2年後期選択必修科目2単位）

保育実習演習Ⅲ（事前事後指導）（3年通年選択必修科目1単位）

保育実習Ⅲ（3年通年選択必修科目2単位）

卒業研究演習（4年必修科目4単位）

卒業研究（4年必修科目2単位）

### 2 理念（なぜやっているか：教育目標）

私の教育理念・目標は、以下の2点である。

- ①学生が保育・幼児教育に関する専門的知識と実践力を身に付けること
- ②学生が大学内外のヒト・モノ・コト（全ての環境）に自立的に関わり、一人の人間として、女性として、保育者として感謝する心と態度を身に付けること

### 3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

・授業においては、学生の主体的能動的な授業参加を促すためにグループワーク、ペアワークなどのアクティブラーニングをできる限り取り入れている。

・保育現場に則した教材（テキスト、視聴覚教材、保育教材、児童文化財など）を用意している。

・保育実習演習Ⅰ、保育実習Ⅰは保育実習に関して幼児教育学科学生が履修する最初の科目である。厚生労働省が定める「保育実習の目的」をふまえ、本学独自の教材を用いて指導している。また、実習では健康第一であることはもとより、本学学生として品性のある信頼できる実習生となるように、実習の心構えはも

とより、挨拶、言葉づかい、立ち居振る舞いなどの指導を厳しく行っている。

・現代社会において保育所の地域と連携は重要な課題である。2023年度に立ち上げた学生のボランティアサークル（ONE+）は、毎月1回程度、附属保育園子育て支援センターかわむらんどと連携した活動を行った。（2025年5月24日、6月7日、7月5日、9月13日、10月19日、11月1日、12月20日、2026年1月24日）（エビデンス3）

#### 4 成果（どうだったか：結果と評価）

・授業においては、講義、演習（ワークシートなど）、振り返りの循環を確認した（エビデンス1）。カリキュラムに即した教材（エビデンス2）を使用している。また、演習科目（子育て支援、乳児保育Ⅱ、保育実習演習Ⅰ、保育実習演習Ⅲ）で実施した実技指導では、保育内容に関する具体的実践の理解が促されたと考えている。

・保育実習演習Ⅰについては、該当学年だけでなく、上位学年の参加によって異学年が交流しながら学び合う機会を設けた。

・学生ボランティアサークル（ONE+）に所属する4年生の卒業研究について、子育て支援センターでの活動を卒業研究にまとめたいという希望に応じ、担当教員（竹内先生）と共に卒業研究を指導した。学生は大学生が地域活動で学ぶことの意味を、子育て支援の観点から報告した。子育て支援活動に継続的にかかわり地域の親子と交流することが保育者の専門性につながることを具体的に示した卒業研究であった。

・2025年教育研究奨励「幼児教育学科と附属保育園の共創プロジェクトの実践研究」では研究代表として、①附属保育園と連携したワークショップ、②園内研修等、③公開保育に取り組んだ。学生の学びの場として、ここでは①の概要を記す。①の概要は以下の通りである。

日程	外部講師	参加者	連携授業（学年）
6月7日（土）	藤田麻里氏	3歳未満児親子	子どもの健康と安全（3年）
6月14日（土）	赤羽拓真氏	幼児親子	表現（2年）
9月13日（土）	平川恭子氏他	3歳未満児親子	保育教職実践演習（4年）*注
10月19日（日）	今井晶子氏他	幼児親子	保育教職実践演習

			(4年) *注
11月1日(土)	竹内啓氏	幼児親子	保育教職実践演習 (4年) *注

\*注 保育教職実践演習履修者は3グループに分かれて1回ずつ参加した。

外部講師には「ワークショップ」であるという条件でお引き受けいただき、学生と共に事前事後の打ち合わせを行った。活動のねらいや役割を共有し、学生は参加者ではなく、参加観察者の一人として取り組んだ。終了後にはレポートの提出を求めた。学生が提出したレポートからは、外部講師が専門とする知見を講義ではなくワークショップとして経験できたことや、乳幼児親子と関わりあうことで保育・幼児教育の学びが深まったことが読み取れた。

保育・幼児教育において「地域との連携」は重要なテーマである。地域を教場にするためには教員の社会とのつながりを生かすことが必須である。また学科が小さくなった現在においては外部講師による新たな観点が学生を刺激することにもなるだろう。

②園内研修では、2025年4月から2026年2月まで10回の園内研修を実施した。概要はセンター年報第10号で報告する(エビデンス4)。

③12月4日に実施した公開保育には我孫子市内だけでなく旭市、香取市からの参加者もあり、「大学のある保育園、保育園のある大学」だからこそできる取り組みとして評価いただいたと考える。

なお、①③については2026年3月発行の「こどもとおとなの学びの扉：附属保育園と大学の共創プロジェクトの実践報告」(学科教員と附属保育園の共著として、著者名を「かわむら保育と教育の会」とした。)(エビデンス5)

## 5 今後の目標(これからどうするか)

- ・学生同士の関わり合い、学び合いの場は保育・幼児教育の学修において重要であることはいまでもなく、異学年同士や附属保育園保育者との連携など、教育方法を工夫していきたい。

- ・園内研修などの取り組みによって、学科と附属保育園が共に学び合う土壌ができたと考える。とくに公開保育の評価は高く、継続した取り組みが期待される。来年度以降の方策については、引き続き附属保育園と共に考えたい。また公開保育に学生が参加して、現職保育者から学ぶことも課題のひとつである。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1 リアクションノート（非公開）

2 テキスト 乳児保育Ⅱ、子育て支援、子ども家庭支援の心理学、保育実習演習Ⅰ（事前事後指導）で使用

3 学生の地域連携活動については、学科 SNS（Instagram、X）、大学ホームページ内学科ニュース等で公開している。

4 江村綾野・関本仁「附属保育園における園内研修の実践報告：2025年教育研究奨励の取り組みより」『教職センター年報第10号』（投稿中）

5 かわむら保育と教育の会『こどもとおとなの学びの扉：附属保育園と大学の共創プロジェクトの実践』一藝社（2026年3月5日発行予定）

以上

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

(1) 共通教育科目

・簿記(1)

(2) 専門教育科目

・保育実習演習Ⅱ（事前事後指導）

2 理念（なぜやっているか：教育目標）

(1) 簿記(1)については、日商簿記3級を目指した内容としており、後期の簿記(2)の両方を履修し、3級を網羅している。経営状況の把握や、経理について学ぶことができる。

(2) 保育実習演習Ⅱ（事前事後指導）については、保育士資格を取得するための保育実習（施設）に向けての事前事後の授業となる。保育士は、保育所以外の児童福祉施設でも働く専門職であるため、乳児院や児童養護施設、児童発達支援センター等の施設や施設実習前の事前・事後指導をしている。

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

(1) 簿記(1)については、テキストを中心として、繰り返し問題を解くことにより、理解を深め、定着を図っている。勘定科目の意味を理解することや、日頃の自分たちの生活に照らし合わせ、仕訳をできるようにしている。期間内に2度試験を行い、学生の理解度を図り、振り返りを行っている。

(2) 保育実習演習Ⅱ（事前事後指導）については、各施設の説明および、事例検討を行い、グループワークを行い、共有している。また、実際に実習にいった4年生に経験談をきく機会を設けている。実習の事後では、他の学生の実習報告をきき、施設別の学びも共有している。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

(1) 簿記(1)については、1回目のテストについては、仮テストを行い、練習してもらっている。テストの結果により、さらに振り返りを行い、期末の試験に向けて、仮試験を行い、試験の練習をして、学生は試験に慣れてもらっている。

(2) 保育実習演習Ⅱ（事前事後指導）については、実習の評価基準を説明し、それに対す

る取り組みの説明を授業内で行っている。また、実習の評価として一番大切なのは、実習生としての姿勢や態度が他の評価にも影響する旨、今までの学生の事例も通して伝えている。

#### 5 今後の目標（これからどうするか）

（１）簿記(1)については、勘定科目の意味や、今後精算表等の作成に向けて、さらに仕訳や決算整理事項について、学び、簿記３級合格を目指す。

（２）保育実習演習Ⅱ（事前事後指導）については、保育実習Ⅱを振り返り、保育実習Ⅲへの課題をみつけ、保育士としての保育観や、将来の職場選択ができるようにする。

#### 6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

（１）簿記(1)については、下記のテキストを使用。

滝澤ななみ(2025)『スッキリわかる日商簿記３級 2025 年度版』TAC 株式会社

（２）保育実習演習Ⅱ（事前事後指導）については、下記のテキストを使用、その他は非公開。

民秋言他編(2022)『施設実習【新版】』北大路出版

## ティーチング・ポートフォリオ

幼児教育学科 氏名 溝口 武史

(記入日：2026年2月27日)

### 1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

「健康」 2年次前期 保育士/幼稚園教諭必修 講義 2単位  
「保育内容健康の指導法」 2年次後期 保育士/幼稚園教諭必修 演習 2単位  
「子どもと運動」 3・4年次前期 選択必修科目 演習 2単位  
「幼児運動指導法」 3・4年後期 選択必修科目 演習 2単位  
「卒業研究演習」 4年次通年 必修 演習 4単位  
「卒業研究」 4年次通年 必修 演習 2単位

### 2 理念（なぜやっているか：教育目標）

教職免許法および指定保育士養成施設設置基準における、幼稚園教諭、保育士の資格に関わる科目として、領域「健康」についてしっかりと理解をし、自ら保育計画を立てたり、実践したりする力を養うことが大切である。

また保育実践における活動内容について、実践を通じて内容を理解したり、援助方法や安全に対する配慮も考えることができる保育者養成をすること。

さらに、「卒業研究」では4年制大学の総まとめとして、自分自身の興味関心を持った課題を見つけ出し、大学としての専門性を備えた論文になるよう学生を支援していくこと。

### 3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

#### ①MicrosoftTeams の活用

どの授業においても学生とのやりとりは Teams を使って行ってきた。座学の授業において、毎回の授業スライド等は PDF 化をしたものを授業直前ではあるが、学生に配布して授業を行ってきた。

また授業後には、毎回振り返りのシートや次回授業に関わる内容の課題を提示し、授業事前・事後学習を促すものとした。

模擬保育については、学生が立案した指導計画を PDF 化し、Teams を通して他の学生も見られるようにし、その模擬保育の相互評価についても、匿名化をし Teams にて学生同士共有をすることとした。また、実際に模擬保育の動画撮影を行い、自分自身の模擬保育を振り返られるようにした。

さらに、最終課題（レポート）提出においても、Teams を活用した。

#### ②反転学習を意識した授業

講義の授業では、授業時おわりには次回の授業範囲（教科書）を伝え、事前に

しっかりと読み込んで、その上で授業では解説を行ったり、グループ活動をおこなったり、不明な点などあれば質問に応じる形をとった。

#### 4 成果（どうだったか：結果と評価）

授業での振り返りについては、他の学生にも伝えたい内容があれば次回の授業において紹介をするなど行った。授業スライド配布については、著作権等の関係で二次配布はしないように協力してもらった。授業において、ダウンロードしたスライドを使用した授業参加の姿も見られ、配布においては今後も行っていくと考える。

Teams の振り返りや課題においては、提出期日を 3～4 日後の週末を設定したところではあるが、期限を守れないケースが度々みられた。他の授業も多くある中での期限設定については、考慮の余地がある。また、提出したものの、字数制限をしていなかったためか、一言（一行）で回答してしまうケースも見られた。教員の思いとしては、その振り返りや課題をさらに深く考察することによって学びを深めてほしい気持ちで設定したものであるが、なかなか意図が伝わらなかった。

反転学習においては、事前に知識を学習した前提で解説やグループワークに取り組んだが、学生からの質問などもなく、淡々と授業が進むという形となった。こちらからの問いかけにも口ごもる場面が多く、今後の課題としてあげられる。

#### 5 今後の目標（これからどうするか）

年次が進む中で課題の残った授業は、もう開講されることはないが、今後の自分自身の学びに役立てるよう取り組んでいきたい。

今回、教員側の思いと学生自身の思いのすれ違いが目立ったのではないかと考えている。特に教員養成、保育者養成科目については、法令でその内容等が示されており、その知識や技術の習得が資格取得に関して必須なものである。そのため、必要な情報はきちんと話をし、グループワークをするところはするなどという、基本的な方針がうまく伝わっていないのではないだろうか。グループワーク等をより多く望む学生が見られるが、本当にそれでいいのかは疑問に感じる。

3・4 年生対象の授業では、夏季の猛暑や、冬期の寒さなどの運動環境としてはなかなか厳しいものはあるものの、より多くの遊び内容を紹介し、子どもたちへの支援の仕方、安全への配慮等、学びを深めていけたらと考える

また、Teams や動画を使った振り返りなど ICT の活用を進めていく。

#### 6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- ・教員が作成した授業資料（非公開）
- ・学生による授業評価アンケート
- ・学生による振り返りシート（非公開）

- ・学生の課題シート（非公開）
- ・教科書「新訂 事例で学ぶ保育内容＜領域＞健康」倉持清美編著、萌文書林

ティーチング・ポートフォリオ

幼児教育学科 氏名 関本 仁

(記入日：2026 年 3 月 8 日)

#### 1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

幼児教育学科専門科目

①教育課程論(3年、選択科目、前期2単位)

②教育の方法と技術(3年、選択科目、後期2単位)

#### 2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

幼児教育学科専門科目

● 教職に就くということに関しては専門職としての素養と幅広い見地が求められる。そのためには、できる限り多くの観点から考察をおこない、学生各人の教職への意欲を確認し、その適性について自ら考え、進路を判断するために必要となる知識を獲得すること、教育思想とその方法の歴史を概観しつつ、その様々な思想が現在おこなわれている教育に対してどのような影響を与えているのかについて考えることができるよう、理論的側面に注目して学ぶことによって個々の学生それぞれが理論的土台を持った教育観・保育観を言語化させることが出来るようになる。

#### 3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

幼児教育学科専門科目

● 入学したばかりの学生たちにとって、教育学に関わる内容については特に、高等学校までの教科学習でカバーされていないこともあり、これまであまり触れる機会は無かったと考えられる。そして、今後教育・保育のあり方について個々が思考し、他者と議論していくにはそのために用いる材料としての知識がかなり不足していると考えられる。そのため、知識の理解に重点を置き、それぞれの知識・事項について各自がそれぞれの関心の方向性模索しながら最終的に総合するかたちとしての期末レポートという言葉化というゴールへ繋げた。予め次の回の授業で焦点化させる内容についての資料を配付し、教科書と併せ個々の学生が問題の焦点化が出来るよう、予習を促した。また、各回の終了後については内容を復習する意味で各自が内容をまとめ整理し、新たに表出した疑問点などを見つけることが出来るよう、UNIPA 上にてリアクションペーパーの提出を課した。

#### 4 成果 (どうだったか：結果と評価)

幼児教育学科専門科目

● 提出されたリアクションペーパーやミニレポート、期末レポートという段階を踏まえた各学生の記述を検証すると、授業内でも強調したことであったが、web 上だけで手軽に情報を入手するだけでなく、ジャーナルや書籍の資料にしっかりとあたることで根拠を持った情報を踏まえて自分の考えを言語化するということが出来る学生がいた一方、かなりそのようなことが不十分であり、復習等も十分でなかった学生がいたことも確かである。これは、授業評価アンケートにおいても正直に回答してもらえたことから、本人に十分に自覚があるということは確認できた。

また、本年度に関しても知識の理解に重点を置きすぎた面が否めず、対話・議論の場が十分に確保できなかったことは大きな反省材料である。そして、その知識の理解についての確認が十分に取れていたかということ、これもまた不十分であったと言わざるを得ない。

#### 5 今後の目標 (これからどうするか)

## 幼児教育学科専門科目

- 知識の理解、という面における改善は、各回の始めに確認小テストを teams で実施することで再確認し、必要最小限の知識は身に付けられるようにしていく。
- ある程度学生が各自で前もって調べておくような課題を課し、各回で自分が知り、考えるべきことは何かを明確に出来るよう高い意識を待って授業に臨めるような環境を設定する。
- 配付する資料についても各回で焦点化させるべきことは 1 ないし 2 つ程度に 留め、その部分を掘り下げていくような内容を展開させていくことによって新たな疑問・課題・関心が表出できるよう、仕掛けを作っていく。

### 6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- ①幼児教育学科の学修ポートフォリオ（非公開）
- ②授業の各回配付資料（レジュメ）（非公開）
- ③授業の各回終了後に課している UNIPA 上でのリアクションペーパー（非公開）
- ④教科書

佐藤哲也編『子どもの心によりそう 保育・教育課程論 〔改訂版〕』福村出版、2018 年。

今井康晴著『保育と教育の方法と技術』 大学図書出版、2024 年。

## ティーチング・ポートフォリオ

幼児教育学科 山下佳香

(記入日：2025年9月1日)

### 1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

2025年度は特に「保育内容環境」授業の学生の学びを具体的に掲載したい。なお、掲載写真については本人了承のもとである。担当科目は以下のとおりである。

#### 〈幼児教育学科2年生〉

「保育内容環境」前期2単位

「保育内容環境指導法」後期2単位

「保育の計画と評価」前期2単位

#### 〈幼児教育学科3年生〉

「教育実習一次」通年4単位

「教育実習演習一次」後期1単位

「幼児教育演習ゼミナール」通年4単位

#### 〈幼児教育学科4年生〉

「卒業研究」通年2単位

「卒業研究演習」通年2単位

「教育実習二次」通年4単位

「教育実習演習二次」前期1単位

「保育・教職実践演習〈幼稚園〉」後期2単位



写真1 大学構内の桜並木

### 2 理念（なぜやっているか：教育目標）

保育者は子どもの感性に寄り添い、認め、共感しあう中で、子ども自身が主体的に自ら伸びようとする可能性を引き出す役目がある。そこで、保育者を目指す学生が、主体的に行動する中で、様々なことに気づいていけるような指導を常に考えていきたいと思う。そして、その気づきに寄り添い、直面している問題や不安になっていることを、どのように乗り越えたらよいか一緒に考えながら、学生自身が主体的に考えることができるような方法を見つけていける支援を目指している。保育は、子どもに「生きる力」を身につけるプロセスを大切にすることである。知識や技術を身につけることが目的ではなく、環境に興味関心や好奇心を持ち、直接体験しながら様々な気持ちを感じていくことである。直接体験する中で、時には失敗や挫折することもある。しかし、大切なことは結果や成果、見た目ではなくプロ

セスである。プロセスの中で、様々な感情を体験する中で工夫したり試行錯誤したり、新たな挑戦をしながら達成感を味わい、自己肯定感を構築していくことこそが「保育」なのである。子ども達の育ちを支えていく保育者自身が「自己肯定感」を持ち、問題解決能力を高めていくことこそ、真の保育者として大切な資質であると考ええる。

そのため実際の授業では、本日の学びのテーマを掲げ、学生たちから身近な話題や疑問点・問題点を出し、グループディスカッションやKJ法を行う中で、自分の考えを自由に話し他人の意見を聞きながらまとめ、ドキュメンテーションを作る中で、「自ら学ぶ面白さを感じられる授業方法を試みている。すると、学生の出席率はとてもよく、自ら学ぼうと次週の授業内容について質問してくる学生や、準備して授業に臨もうとする学生が見られるようになった。主体的に学ぶことの面白さを実感することによって、子ども達に大切な「主体的に学ぶ面白さ」を自然に保育の中で活かすことができると確信している。人間は、体験することによってより具体的にとらえることや考えることができ、また俯瞰して物事を広くみることもつながると考える。保育者にとって、自身の考えのみでなく、いろいろな人の意見を受け止め、多角的な視点を持つことが今後の保育者に求められることであるとを感じる。そのため、保育者養成校では、「アクティブラーニング」を大切にしたい学びの方法を行っていくことが、今後も教育の真髄であると考ええる。

### 3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

【幼児教育学科2年生「保育内容環境」前期2単位】

「社会環境」「自然環境」「地球環境」…この地球上のすべてのひと・もの・ことが「環境」である。私たちは「環境」からたくさん恩恵や影響を受けて生活している。日本は春夏秋冬がとても美しい国であり、その季節ならではの木々や花が実り、農作物や食生活も四季が関係している。四季を楽しむ年中行事（春のお花見、夏のスイカ割り、秋の焼き芋パーティー、冬のクリスマス…）「自然環境」と共生しているからこそ直接体験しながら、様々なことを感じ、考え、発想力や工夫も広がる。



写真2 Kawajo 正門前花時計からオリエンテーリング出発

しい国であり、その季節ならではの木々や花が実り、農作物や食生活も四季が関係している。四季を楽しむ年中行事（春のお花見、夏のスイカ割り、秋の焼き芋パーティー、冬のクリスマス…）「自然環境」と共生しているからこそ直接体験しながら、様々なことを感じ、考え、発想力や工夫も広がる。

本授業では、子どもたちが「様々な環境の中で生きる楽しさ」を感じられるような「保育環境とは何か」をテーマに、学内の日々変容する「自然環境」に目を向け、直接体験しながら「気づき」「感じる」＝感性を高めることを目的としている。同時に、幼稚園や保

育所の集団生活の中で体験・経験する面白さを学生同士が学び合い、人と人が互いの違いを認め支え合う意味を感じながら、子どもの一人ひとりの良さやらしさを発揮できる環境づくりの探究を目指している。

〈🌿 Kawajo キャンパスオリエンテーリング 🧑‍🦲 ・コラー獣（コラージュ）遊び 🐾〉

学内色々な箇所にポイントを置き、マップを参考にグループで協力し合いながら、ポイント箇所のお題に答えていくグループワークを行った。学生たちは、学内を散策しながら木や花の名前を調べ、「へえ～そうだったんだ」「アジサイって色々な種類があることを知りました」と日ごろ見ている自然に改めて目を向けることの大切さに気づき、当たり前としている環境には面白さや魅力があることを感じていた。また、初めて見る草花やこんなところにこんな虫や生き物が！とグループごとにたくさんの発見や驚きがあり、一人ひとり普段気づかなかったことに気づき互いに喜びあう姿があった（写真2）。そして、季節の木々や花を写真に撮り、その写真を集めて「自然コラージュ遊び」を行った（写真3）。インスピレーションで写真を選び、はさみで切り、組み合わせることで「オリジナルコラー獣」ができあがった。自然界から現れた自分にしかないオリジナル作品に、一人ひとりの個性があふれ、身近な環境から表現することの面白さを経験した。



写真3 学生たちが作った「オリジナルコラージュ獣」

このように、日ごろ当たり前としていることにとっても深い意味があり、目の前のことをじっくり調べることで新たな発見や面白さを見つけた。気づく⇒感じる⇒調べる⇒発見⇒新たな気づき…このプロセスこそが子どもたちの成長にはとても大切であり、「生きる力」につながっていることを改めて体得した。保育施設において、子どもたちが散歩を毎日行うことの意味は「探求心」を高めていくことであると確信した。

〈🌸春の野草でお弁当作り🍱〉

緑豊かなキャンパス内にある野草探検をし、思わず「〇〇みたい」「〇〇に見える」と見立て遊びやごっこ遊びを始めた学生たち。一人ひとりが子どもになりきって、遊びを考え、画用紙をお弁当箱の形に見立てて作って遊んだ。身近な素材の工夫で色々な遊びを考える面白さを友達と一緒に共有し、子どもたちと一緒にいったらより楽しいだろうな…と誰もが心を高鳴らせていた（写真4）。



おいしすぎて

みんなのお弁当勢ぞろい！

元気がでる！

半分食べちゃった弁当！

写真4 草花弁当づくり

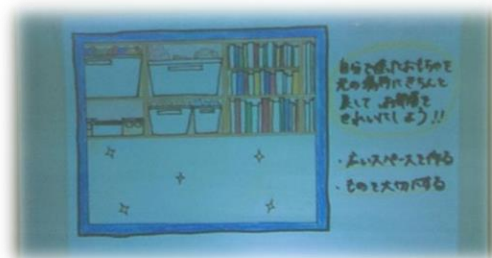
キラキラ運動会弁当！

〈🚗自分たちで考えたマークや標識🚗〉

オリエンテーリングや附属保育園観察をしている中で、道路や保育施設廊下に「こんなところにこんなマークや標識があったらおもしろい！」「子どもたちも思わずしたくなるような標識」を学生一人ひとりが考え、友達の前で発表した（写真5）。目で見て認識する面白さや理解しやすいことから可視化することの意味を学んだ。このマークをみた学生たちは、マークや標識って面白い、人は耳で聞いて情報を得るばかりではなく、目や手触り、においなど理解方法はいろいろあることを知り、子どもたちへの環境設定のアプローチとして可視化することから、子どもの主体性や自立心につながると確信した。



テーマ：そっと開けてね閉めてね



テーマ：みんなのピカピカ製作コーナー

写真5 自分たちで考えたマーク

〈育ちのプロセスを体験しよう～ジャガイモ栽培～〉

保育は結果や成果を求めることではなく、育ちの過程を大切にすることで、ジャガイモを育てることを授業で行った。

ジャガイモ一つひとつに育ち方に違いが見られ、周りの環境の影響や育て方など、保育者としての援助の大切さを学んだ。そもそもジャガイモは何科の植物であるのか、また植え方や肥料の与え方、育て方などテーマを決めて調べた。ジャガイモは市場には一年中あるため、旬の季節も知らなかった。しかし、調べていくと種類や大きさなどもさまざま、何気なく食しているジャガイモの存在の奥深さを感じた。

4月に苗床作りから始め、雑草を抜き、鍬やスコップで畝を作った。そして、種芋を半分に切り断面に灰をつけて種芋植え。学生一人ひとりが「ジャガイモさん大きくなってね」と誰もが優しい気持ちでジャガイモの種芋を植えていました（写真6）。



写真6 種芋植え

5月ジャガイモが土から目を出し始め、日ごとにどんどん大きく成長した。そして、目かきを行い、周りの雑草を抜き、肥料を上げて、自分のジャガイモに愛着心を抱いた。

6月雨がたくさん降る中、毎日ジャガイモがどのように育っているのか気になり、様子を見ては土が雨で流れないように工夫し、盛り土を行った。

7月いよいよジャガイモ収穫祭を行った。思った以上にたくさんの収穫に驚いた（写真7）。自分たちが愛



写真7 収穫したジャガイモ

情をかけた分、ジャガイモにも伝わったのだと学生たちは口々に言っていた。まさに、保育も同じようなことが言えるのではないだろうか。なんでもしてあげるのではなく、育とうとしている姿を後押しする気持ちや相手に合わせた援助のタイミングや方法を考えることが大切であることを学んだ。収穫したジャガイモは「子どもの食と栄養」の授業と横断的つながりを大切にし、さまざまなジャガイモ料理を考え、グループごとにプレゼンテーション行った（写真8）。そして、グループごとに考えた方法で、「芋餅」を作りみんなで食した。味は普段以上に格別においしく、ほかにもいろいろな料理に挑戦する気持ちも芽生えた（写真9・10）。



写真8 子どもたちにわかりやすく紙芝居を作って説明      写真9 自分たちで考えた「芋餅」づくり      写真10 好きな形に成形し「芋餅」として完成

〈📝ドキュメンテーションづくり・発表📢〉

昨年度「幼児教育体験学習」にて、野菜の観察日記をつけたことから、今回のジャガイモはドキュメンテーションとして育ちの過程を各自まとめた（写真11）。ジャガイモを育てる過程の中で、気づきや感じたことを各自がまとめ、一人ひとり発表を行った。発表する中で、互いに思いを共感・共有することの大切さをドキュメンテーションづくりから学んだ。附属保育園では、子どもたちの毎日の様子をドキュメンテーションとしてまとめている。今回のジャガイモ成長ドキュメンテーションも「気づき」「感じる」「考える」「改善する」意味で、保育につながるのではないかと考え、目の前のことを可視化する大切さを学んだ。

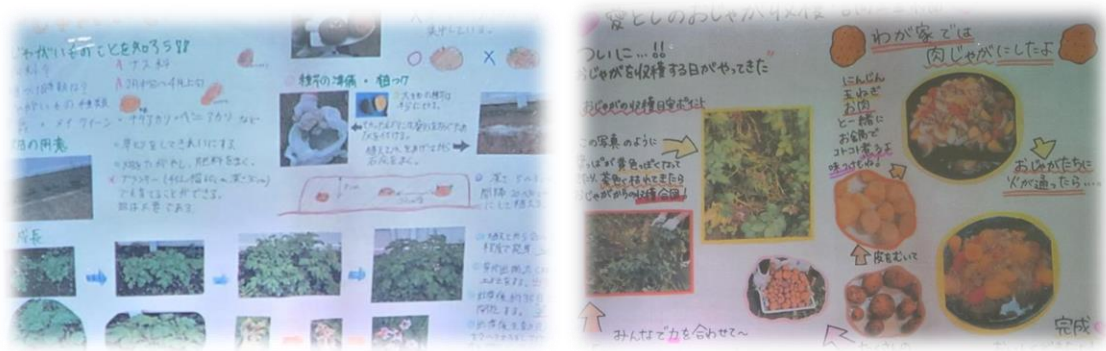


写真11 ジャガイモ成長ドキュメンテーション

【幼児教育学科2年生「保育の計画と評価」前期2単位】

保育の基本は、子どもの発達や育ちを理解することであり、子どもの発達は年齢ごとの目安はあるものの、子ども一人ひとりによって違い、その一人ひとりの特徴やらしさを大切にしたい援助が必要不可欠である。保育は結果や成果を求めることなく、育ちの過程を大切にしたい意味「保育とは何か」、「教育」と何が違うのか、出生から就学前まで「保育」の大切さについて、「見守る」「寄り添う」「共感する」など子どものありのままの姿や、子ども一人ひとりの可能性や伸びようとする力を支える、きっかけづくりをする過程についてDVD教材や附属保育園での観察を通して実践的に学んだ。指導計画を立案しながら気づいたことは、保育者の環境構成が大切であることを学び、子ども一人ひとりの発達や育ちの姿を捉え、時期や季節、子どもの興味・関心に即した指導計画を具体的に考えた。子どもの発達段階を年齢ごとに捉え、その時期に合わせた援助のあり方を学生同士でディスカッションしながら考えた。2・3・4・5歳児の指導案をグループで立案し、模擬保育を行った。まだ予測不十分なこともあり、戸惑いながらも学生たちと考えるながら行えたこと、実践したことによってさまざまな発見があり、ふりかえりでは環境設定の再構成を考えることができた。2月の保育実習Ⅰに向けて意欲的に取り組もうとしている。

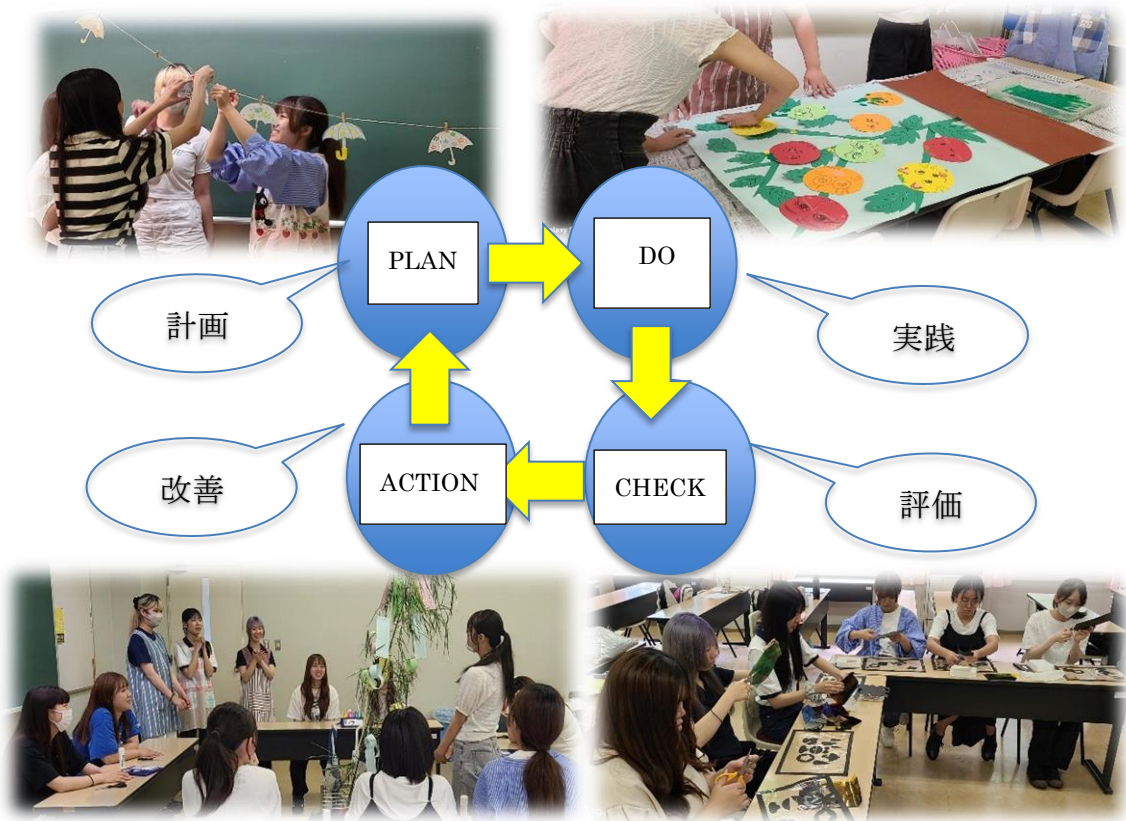


写真 12 2・3・4・5歳児の模擬保育を行いながら改善点を話し合う

### 【幼児教育学科4年生「教育実習演習二次」前期1単位】

実習集大成として、学生自ら学べるよう「実習課題チェックシート」「実習自己学習シート」を授業初回に配布した。また、「実習手引き」をファイリングし、学生自身が復習や予習ができるように準備した。授業毎時の学習のねらいやポイントを伝え、学生自身で理解できるよう順序立てて授業を進めた。実習に向けた事務処理や書類作成、記録や指導案立案など、予め Teams を使って見本など送り、作成ポイントを伝えることによって、効果的に実習準備を進めることができた。

実践部分を高めるため、毎回の授業時に「手遊び」や「絵本の読みきかせ」など「児童文化財」を一人ずつ行い、「児童文化」の楽しさから「導入」の大切さを学び、子どもにとって「きっかけづくり」や声かけの重要性を学んだ。

また、「責任実習指導案」の立案を行い、模擬保育を実践し、保育者役、子ども役、観察者役に分かれ、ねらいや内容、環境構成などから、より具体的な物的環境のあり方や言葉掛けノタイミング等互いにじっくり考え、教育実習に向けて意欲を高めた。



写真 13 実習前の学び合い（児童文化発表・模擬保育）

実習後は、実習園評価をふまえて、実習指導担当と学生一人ひとりと面談指導を行った。自分自身の10日間をふりかえり、客観的な評価と主観的な評価でどのような差が見られるのか、差は何を意味しているのか、反省点や改善点を考え、個別カルテに記入して後期の学びにつなげていきたいと思う。個別の面談をふまえて、模擬保育メンバーで話し合いを行い、実習前に計画した「指導案」や「模擬保育」を園にて実践してみて、環境構成はどうだったのか、子どもたちの反応や子ども一人ひとりへの援助はどうだったのか、それぞれの意見交換をする中で学びを深めていった。また、「わらべうた」と「身近な素材を使った遊び（新聞紙）」を学生同士で学び合い、保育技術を高めた。



写真 14 実習後の学び合い（ふりかえり、保育技術）

#### 4 成果（どうだったか：結果と評価）

##### 【様々な環境に好奇心や探求心をもって関わる＝豊かな心へ】

本授業では、身近な環境や自然と触れ合う中で様々な事象に興味関心をもち、発見を楽しんだり、考えたりする意味を学生の学びのプロセスを示した。学生たちは、色々な友達と意見交換をすることができ、考え方や視野を広げる大切さを学んだ。自分から思わず関わってみたいくなる環境の魅力や関わってみて初めて気づいたことや発見したことを互いに共有する楽しさやおもしろさに気づいた。環境は人（人的環境）や自然や物（物的環境）が相互に関わり合い、そして季節や時間の中で変化し合うおもしろさを感じ合うことが環境の醍醐味であると実感していることを授業評価アンケート結果からも確信した。

子どもにとって「なぜ環境が大切なのか」・・・それは、周りの身近な環境から様々なことを感じ、考え、そして工夫していくプロセスが「生きる力」に繋がるのである。このような意味においても、乳幼児にとって最も大切なことは、「五感を通して感じる・考える」ことであり、直接体験の大切さを学生たちと学び合うことができた。（図1）

「環境」はじめ「保育の計画と評価」、「教育実習演習」など演習科目であるため、できるだけディスカッションやグループワークを多くしたことによって、質問なども自然に出ることも多く学生一人ひとりの理解に繋がったのではないかと思う。本日の学びの視点を明確にし、学生一人ひとりが授業内容を理解しやすくなった。

アンケート結果にも「シラバス通りに進めていた」「実践や話し合いが多く、学生自身で主体的に進めることができた」「理解しやすかった」という意見が多かったと思われる。しかし、事前事後学習のレポートの量が多いという意見が多く、ゆとりを持った課題

の提示の仕方をしたいと思う。事前事後学習は課題提示ではなく、学生が主体的に学ぶことができるような方法を考えていくことを今後の課題にしたい。

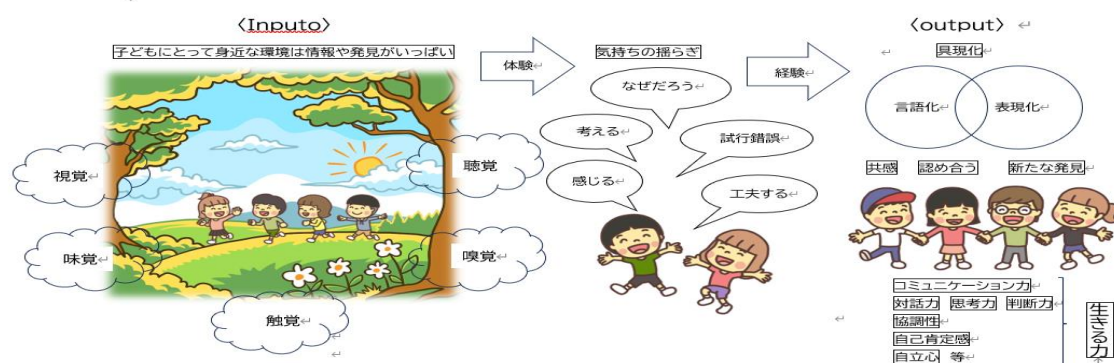


図1 子どもにとって環境の学びの大切さ（筆者作成）

## 5 今後の目標（これからどうするか）

乳幼児期は発達に合わせて集団生活で大切にしたい柱〈ねらい〉と〈五領域〉を元に、各幼稚園や保育所において日々の活動が具体的に示されている。子どもたちは昨日と同じ景色や光景を見ても新たな気づきや発見をし、周りの大人は驚かされる。それは、大人にはない独特な発想力や想像力、空想力があり、子どもならではの世界のおもしろさを感じずにはいられない。保育の魅力はまさにそこであり、実は環境を通して行う教育の意味は、「子どもの世界観」を大切にすることなのではないかと感じる今日この頃である。

保育内容領域「環境」で学んだことは、後期は「保育内容環境指導法」の授業に繋がっていく。子どもにとって「環境の大切さ」をもう少し深めていくために、後期の季節だからこそ経験できる内容を考え、五領域それぞれの繋がりを大切にしたい。

人間の成長は、予測や見通し通りには進まない。そのとき、その場でどのような対応が大切なのか、具体的に何が必要なのか、日々子どもたちと生活する中で模索していくことが保育の醍醐味であり、保育はまさにアドベンチャーの連続であると感じる。「子どもの捉え方」「子どもの育ちの考え方」「子ども一人ひとりに合わせた計画」など、授業の振り返りを他の授業に活かすことができるような、点と点を結び付け総合的な学修ができるよう、学生一人ひとりの意見も取り入れながら教授方法を考えていきたいと考える。

## 6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- ・ 学生のポスター発表や作品、ワークシート（学内のみ）
- ・ ふり返しシート（非公開）
- ・ 学生課題提出シート（非公開）

- 学生授業時ノート（非公開）
- Forms の記述（非公開）

以上

## ティーチング・ポートフォリオ

幼児教育学科 氏名：山下佳香

(記入日：2026年 2月 2日)

### 1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

2025年度後期担当科目は以下のとおりである。

#### 〈幼児教育学科2年生〉

「保育内容環境」前期2単位

「保育内容環境の指導法」後期2単位

「保育の計画と評価」前期2単位

#### 〈幼児教育学科3年生〉

「教育実習一次」通年4単位

「教育実習演習一次」後期1単位

「幼児教育演習ゼミナール」通年4単位

#### 〈幼児教育学科4年生〉

「卒業研究」通年2単位

「卒業研究演習」通年2単位

「教育実習二次」通年4単位

「教育実習演習二次」前期1単位

「保育・教職実践演習〈幼稚園〉」後期2単位



附属保育園にて秋の実探し(幼児教育演習3年生)

#### ○2年生「保育内容環境指導法」後期2単位

前期の理論を基盤とし、学内フィールドワークやディスカッション、グループワーク、附属保育園での模擬保育を通じ、「ひと・もの・こと」との直接体験を重視した。季節の移ろいを五感で味わう実践を通じ、『保育所保育指針』における領域「環境」の理解を深め、2年次2月の「保育実習Ⅰ」へ向けた実践的スキルの向上を図った。



附属保育園にて模擬保育実践場面（保育内容環境の指導法 2 年生）

### ○3 年生「教育実習演習一次」 通年 4 単位

これまでの施設実習・保育実習の学びを幼稚園教育実習へ有機的に繋げる「学びの連続性」を重視した。『幼稚園教育要領』の「10の姿」を軸に、発達に即した指導案作成と模擬保育（三者評価：保育者・子ども・観察者）を行い、多角的な分析力を養った。

### ○3 年生「幼児教育演習ゼミナール」 通年 4 単位

本科目は、4年次の卒業研究に向けた「探究の土台作り」と位置づけている。学生の「体験から学びたい」という意欲を尊重し、季節ごとの遊びの実践や「東京おもちゃ美術館」での学外演習を取り入れた。特に注力したのは、体験を単なる「楽しかった」で終わらせず、「環境構成」や「木育」といった専門的視点から討論し、先行文献と照らし合わせるプロセスである。全30回の授業において、毎回のレポート作成を課すことで、学生自身が「自分の関心の核心」を自覚できるよう指導した。その結果、全員が欠席することなく主体的に参加し、Word や Excel のスキルも互いに教え合うなど、ゼミ内での協働的学びの姿勢が醸成された。2月の教育実習を目前に控え、実習での気づきを研究手法（メソッド）に昇華させる準備が整っている。

### ○4 年生「卒業研究」 2 単位 「卒業研究演習」 2 単位

学生が実習現場で抱いた「なぜ？」という素朴な問いを、学術的な研究テーマへと深化させる指導を行った。ごっこ遊び、泥団子遊び、食育環境（アレルギー対応）、わらべ歌の音階など、多岐にわたるテーマに対し、前期は徹底した文献研究を指導し、理論的枠組みを構築させた。

6月の教育実習後には、現場での事例分析や保育士・栄養士への聞き取り調査

といった質的調査の方法論を具体的に指導した。自ら立てた仮説と、実際の調査結果の差異に直面した際、それを「失敗」ではなく「新たな発見（考察の種）」として捉え直す支援を行うことで、物事を多角的に深く探究する面白さを体感させた。仮説と異なる結果が出た際も、それを「現場の生きた姿」として深く考察する姿勢を育んだことは、理念である「感性を高める」ことが、質の高い保育実践や研究へと直結することを示唆している。

最終的に、一人ひとりが保育者としての専門的な視点を持った論文を完成させるに至った。

#### ○4年生「保育・教職実践演習（幼稚園）」後期2単位

4年間の学びの集大成として、自己のリフレクション（省察）を深化させた。下級生の模擬保育へのアドバイザー参加や、自身の学修成果のプレゼンテーションを通じ、保育者としてのアイデンティティを確立。卒業研究への内発的動機付けを強化した。

## 2 理念（なぜやっているか：教育目標）

私の教育の根幹は、学生が自ら動く「アクティブラーニング（体験型学習）」にある。環境との出会いは「一期一会」であり、目の前の事象を自分事として捉え、前向きに挑戦する姿勢こそが、将来の保育者に求められる資質だと考える。

学生一人ひとりが環境に対して「応答的」に関わり、工夫する楽しさを共有できる「共生的な学びの場」の創出に努めている。

知識として「環境」を学ぶだけでなく、実際に土に触れ、木のおもちゃの温もりを感じ、季節の風や音を五感で受け止める経験こそが、子どもの心の機微に寄り添える保育者の資質を育むと信じているからである。

## 3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

### ・「原体験」の重視と感性の育成

レイチェル・カーソンの「感じる力」を基点とし、五感を用いた自然体験（アドベンチャーラリー等）や、東京おもちゃ美術館での学外学修を導入。

知識の習得以前に、心が動く瞬間の大切  
させた。



東京おもちゃ美術館見学〔幼児教育演習3年生〕

- ・ **リフレクションの質的向上**

毎回の「リフレクションシート」に対し個別フィードバックを徹底。学生の「気づきノート」を、自己対話と要点整理のツールとして定着させ、思考の言語化能力を高めた。

- ・ **心理的安全性と自己表現の場作り**

アイスブレイク活動を積極的に取り入れ、自分の思いを自由に伝え合える、保育現場に即した「受容的な環境」を構築した。

- ・ **ICTの戦略的活用**

保育観察の動画分析による「子ども理解」の深化、およびクラウド（Forms等）を用いたペーパーレス化やプレゼンソフトの活用を指導。ICTを、単なる効率化ではなく「省察と共有」のための強力な武器として位置付けた。

#### 4 成果（どうだったか：結果と評価）

- ・ **主体的な学びのサイクル**

目的意識が明確化し、自主的な質問や図書館利用が増加。学習のPDCAサイクルが確立された。

- ・ **リフレーミングによる自己肯定感の向上**

机間巡視による個別の称賛や、互いの良さを認める「リフレーミング」の習慣化により、ゼミの出席率100%という高い意欲と帰属意識を実現した。

- ・ **実践と理論の統合**

学生の振り返りの中に「環境の醍醐味は人との関わりの面白さにある」といった深い洞察が見られ、領域「環境」のねらいと内容が、個人の実感として統合された。

- ・ **五感を通じた理解**

実際に「Good TOY 賞」を受賞した優れたおもちゃを教室に持ち込み、学生全員で手に取る時間を設けた。木の質感や音、造形美に直接触れることで、子どもにとっての「おもちゃの価値」や「木育の楽しさ」を、自身の感覚を通して語り合うことができた。

- ・ **共生のまなび**

ゼミ内での発表会では、単なる報告に留まらず、互いの気づきを率直に共有し合う「対話の場」を重視した。他者の視点に触れることで自分の感性が磨かれる経験を重ね、ゼミ生全員が30回欠かさず出席するという強い結束力と

学習意欲に繋げることができた。

#### ・研究手法の主体的な選択

質の高い研究を行うため、まずは多様な研究手法（文献研究、インタビュー調査、観察調査など）を整理して提示した。その上で、自分の問い（テーマ）を解き明かすにはどの手法が最も適しているかを学生自身が理解し、選択できるように伴走した。

#### ・実践と理論の融合

保育所での聞き取りや事例分析といった具体的な調査プロセスをとおして、自分が五感で感じた仮説を検証していく面白さを伝えた。自ら導き出した考察は、将来保育者として現場に立つ際の「確かな専門性の拠り所」になると確信している。

### 5 今後の目標（これからどうするか）

#### ・プロセスの可視化と子ども理解

結果以上に、学びのプロセス（自発性から主体性への移行）を大切にし、附属保育園とのさらなる連携を通じて、学生の「子ども理解」を深化させる。

#### ・教員間連携による学びの共有化

領域「環境」を軸に、他領域担当教員との対話を促進し、学科全体としての「学びの連続性」を強化するカリキュラムデザインを目指す。

#### ・ハイブリッドな授業展開の開拓

ICTをさらに活用し、直接体験（リアル）と間接体験（バーチャル・動画資料）の相乗効果を生む、次世代型の授業モデルを構築する。



附属保育園誕生祝い会出し物（幼児教育演習3年生）

## 6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- ・ 学生によるプレゼンテーションや作品、実践発表（写真資料掲載）
- ・ ポスター発表成果物およびワークシート（学内掲載）
- ・ 個別コメント入りリフレクションシート（非公開）
- ・ 学生課題提出シート（非公開）
- ・ ICT 活用によるプレゼンテーション・スライド（非公開）
- ・ 学生の「気づきノート」（非公開）
- ・ Forms による記述回答データ（非公開）



4年間の感謝の気持ちをランタンに託して・・・（保育・教職実践演習4年生）

# ティーチング・ポートフォリオ

幼児教育学科 大澤里紗

記入日 (2026年2月21日)

## 1 教育の責任 (何をやっているか: 担当科目)

「表現」2年次前期、必修科目、演習  
「ピアノ演習」2年次通年、選択必修科目、演習  
「子どもと音楽」3年次前期、選択必修科目、演習  
「幼児音楽指導法」3年次後期、選択必修科目、演習  
「教育実習演習(事前・事後指導)」4年次集中、選択必修科目、演習  
「幼児教育演習」3年次通年、必修科目、演習  
「卒業研究」4年、必修科目 通年4単位

## 2 理念 (なぜやっているか: 教育目標)

保育者養成における音楽教育の根幹は、子どもの音楽的表現を支え、育むことのできる保育者の育成にある。特に以下の3点を重視している。

- 1 保育者として必要な音楽の基礎知識と技能を確実に習得させ、読譜力、演奏技術、音楽理論の理解など、実践の土台となる力を育成する。
- 2 子どもの発達段階に即した音楽活動を理解し、実践できる指導力を養成する。子どもの自発的な音楽表現を理解し、適切に支援できる専門性を育むことを目指す。
- 3 様々な音楽活動を通して、学生一人ひとりの感性を高める。子どもの心に寄り添い、豊かな表現を引き出せる保育者を育成する。

## 3 方法 (どのようにやっているか: 実践の工夫)

- ① 少人数制による個別指導の実践
  - ・少人数制の利点を活かし、個人レッスンを中心とした実技演習を行っている。学生一人ひとりの習熟度や課題に応じた丁寧な指導を行い、学びをサポートしている。
- ② 理論と実践を往還する体験的な学び
  - ・「子どもと音楽」「幼児音楽指導法」では、講義と演習を効果的に組み合わせた実践的な学びを展開している。講義で学んだ内容について、実際に身体を動かし、体験的かつ身体的に学びが深まるような授業を実践している。
- ③ 実践的な学びの場の提供
  - ・附属園での発表など、学生の発表の場を多く設け、実践的な経験を積む機会を確保している。現場での活用を見据えた実践力の養成を重視している。また、学外での音楽活動などを通して、様々な音楽文化に触れる経験を持てるようにする。
  - ・学生の実践力向上を目的として、外部講師による打楽器ワークショップを2年間継続的に実施している。打楽器の基礎的な奏法の習得から、附属保育園での親子参加型ワークショップにおける援助者としての実践へと段階的に経験を積む構成としている。また学外研修として外部講師によるファミリーコンサートの見学を取り入れ、体験的な学び・保育現場での実践・鑑賞としての舞台表現という三つの学びを結びつけている。
- ④ 総合的な表現力の育成
  - ・「表現」では、造形と音楽を融合したオペレッタ制作を取り入れている。衣裳や舞台装置の制

作、音楽づくり、歌唱指導・演技指導を組み合わせることで、保育の現場に直結した総合的な表現力を養成することを目指した。

#### 4 成果（どうだったか：結果と評価）

##### ① 少人数制による個別指導の実践

・「子どもと音楽」「幼児音楽指導法」では在籍学生数の減少により履修人数が大幅に少なくなったが、少人数であるからこそ学生一人ひとりの学びたい内容に寄り添った指導が可能となり、きめ細かな学習支援を実現した。

・「ピアノ演習」では初学者から経験者まで、個々の習熟度に応じたマンツーマン指導により、着実な上達が見られた。学生による授業評価アンケートにおいても評価が高かった。また、毎週課題を提示することで学生の学習意欲が維持され、継続的な練習の習慣が定着した。

##### ② 理論と実践を往還する体験的な学び

・弾き歌いや新曲の学習においては、単に演奏できるようになることにとどまらず、保育現場を想定した音楽あそびへの展開や、音楽指導への応用方法を具体的に指導した。授業で得た学びは附属保育園での実践や模擬保育、ボランティアサークルでの活動へと広がりを見せており、学生自身が学びを保育の文脈に結びつけていく様子が随所に見られた。理論と実践を往還する学びの積み重ねが、主体的に音楽活動を構想する力の育成につながった。

##### ③ 実践的な学びの場の提供

・「ピアノ演習」では鶴雅祭でのコンサートを開催し、ソロや連弾など学生が主体的に表現できる場を設けた。演奏経験を通して、仲間と協働して創りあげる力と音楽的な表現力が向上した。また後期からは伴奏法を取り入れ、保育実習・教育実習を見据えた弾き歌いに向けた指導を早い段階から行ったことで、学生の苦手意識の軽減につながった。

・「幼児音楽指導法」では附属園においてわらべうた遊びの実践を行った。遊びの構成と指導の流れを組み立てる力を身につけるとともに、遊びの中に音楽の基礎的な要素を自然に織り込んで子どもに伝える指導方法を学んだ。実践を通して、保育現場における音楽指導の在り方を体得する機会となった。

・2年間継続して実施した打楽器ワークショップでは、基礎的な奏法・理解の習得を土台に、今年度は附属保育園での親子参加型ワークショップに援助者として臨んだ。子どもと保護者の活動を実際に支える経験を実践的に学んだ。さらにファミリーコンサートの見学を通じて、演奏体験→現場での実践→鑑賞という異なる形で音楽活動の関わり方を体験し、音楽を多角的に捉える視点が養われた。

##### ④ 総合的な表現力の育成（「表現」）

・「表現」では附属園においてオペレッタの発表を実施した。衣裳や舞台装置の制作から音楽づくり、歌唱指導・演技指導まで一貫して取り組んだことにより、学生たちは幅広い角度から表現力を身につけた。造形と音楽の統合的な制作活動を通して、保育の現場における総合的な表現活動への理解と実践力が深まった。

#### 5 今後の目標（これからどうするか）

音楽の学びは短期的なものではなく、一連の流れと繋がりを持って長期的に進められるべきものである。1・2年次を音楽の基礎を固める時期、3・4年次をその応用段階と位置づけ、学びが確実に積み重なり将来の実践力として開花できるようサポートすることが重要である。

3・4年次の学びにおいては、これまで培った基礎的な力を保育・教育の場でどのように活かすかを学生自身が考える力を育てることを重視する。音楽がなぜ保育・教育の現場に必要なのかという問いを出発点に、音楽指導や音楽遊びの展開について具体的に深めていく。また、音楽を単独の領域として捉えるのではなく、他の領域と有機的に結びつけた活動へと広げていくことを意識した指導をしていきたい。

#### 6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- ・教員が作成した授業資料（非公開）

- ・ 学生による授業評価アンケート
- ・ レッスンノート（非公開）
- ・ 学生による振り返りシート（非公開）
- ・ 学生の作品、課題シート（非公開）

以上